

星空の下の歴史：井原市美星地区

美星地区は、井原の中心部から車で 20 分ほどの山間部に位置する。この地域では、井原の侍の時代の一端が再現されているほか、伝統園芸と夜景の両方が保持されている。

中世夢ヶ原

中世夢ヶ原は、中世の村を再現した歴史文化公園である。建物や間取りは、考古学的資料やこの時代を描いた絵巻物をできるだけ忠実に再現している。村は、この時代にふさわしい材料と技法で造られている。たとえば、むき出しになった木の梁や柱をよく見ると、手持ちの斧の刃で形を整えた杉綾模様が残っている。このリアルさが、時代劇のロケ地として利用する映画制作会社や、趣味の写真家、コスプレイヤーを惹きつけている。

中世夢ヶ原の村の広場には、実際に商品を販売しているお店一軒や、4 月から 11 月にかけて週に一度の鍛冶の実演が行われる刀鍛冶を含む、様々な店舗が再現された市場がある。

園内のあちこちにある農家ごとに異なる間取りは、人々が生活空間と作業空間をどのように配置していたかを示している。例えば、上級の農民武士をモデルにした家は、馬を飼うための馬小屋と、紛争時に村を守るための武器などを備えた大きな家となっている。

丘の上には山城の物見櫓が再現されている。守備兵は梯子のような急な階段を登って山賊や敵軍の接近を監視し、その下には食料、水、武器を貯蔵する要塞があり、武士たちが攻撃に備える拠点となっていた。

備中神楽

美星吉備高原神楽民俗伝承館は、中世夢ヶ原の正門の外にあり、備中神楽を上演する施設である。備中神楽はこの地方に伝わるスタイルの神楽で、神々をもてなし、祈りを捧げるための神聖な儀式であり舞であり劇である。神楽には儼かなものから豪華なものまであり、神や物怪の登場する神話を鮮やかな衣装と仮面で表現する形式が多い。備中流は後者のカテゴリーに属し、その舞の多くは、巨大な敵との英雄的な戦いを表現している。ホールの前にカラフルな蛇の像は、そのような怪物である 八岐大蛇（伝説上の八つの頭を持つ大蛇で、舞台では複数の役者によって演じられる）の衣装をモチーフにしている。とはいえ、備中神楽はやや控えめなスタイルと考えられており、備中神楽を愛好する人々は、より劇的な派手さを求めるのではなく、地元の伝統を守ることを好む。

伝承館には、地元の備中神楽で使用される衣装、仮面、小道具の博物館があり、劇場スペースもある。神聖な空間とされる舞台は小さなひな壇で、畳が敷かれ、撚り藁の注連縄が張られ、頭上には縁起の良い切り絵が施された華やかな紙飾りが吊るされている。床席は舞台

の端から始まり、観客は面を付けての舞や剣を振り回すアクションを間近に鑑賞することができる。

星へのメッセージ

美星という地名は「美しい星」を意味する。山間の澄んだ空気はもちろんのこと、特殊な街灯を設置するダークスカイ保存の取り組みにより、光害が少ない。そのため、公開天文台やJAXA（宇宙航空研究開発機構）のスペースデブリ観測所があるほど星空観測に適した環境である。2021年には美星町がアジア初のダークスカイ・コミュニティに認定された。しかし、この星への関心は今に始まったことではない。

地元の伝説によると、農民たちは美星の上空で流れ星が3つに分裂し、地上に落下するのを目撃したという。人々はその破片がどこに落ちたかを追跡し、落ちた星を祀る簡単な祠をその場所に建てた。1324年、この3つのうちの1つが移され、星尾神社という大きな神社とされた。

この神社は、昼間は静寂に包まれているが、毎年恒例の星にまつわる七夕の祭りでは、その星とのつながりから人気を博している。七夕には、全国の人々が短冊と呼ばれる色のついた紙切れに願い事を書き、笹に吊るす。1989年、星尾神社の宮司が、祈祷と神聖な火で短冊

を燃やす儀式を通して、その願いを天に届ける公開の神事を執り行った。今では 8 月 7 日の
神事には、星尾神社の星とご縁を信仰し、願いを叶えるための助けを得ようと、全国から短
冊と参拝者が集まる。